



1_ 母なる湖、猪苗代湖の前で初ライブとなった猪苗代湖ズ。「I love you & I need you ふくしま」の熱唱で会場は一つになった 2_ トップバッターで登場したサンボマスター 3_ 聴衆の中に飛び込み、メッセージを叫ぶ BRAHMAN 4_ 昨年に引き続き福島を訪れた高橋優さん 5_ 熱い歌とメッセージで会場を盛り上げた怒髪天

NOTHING BEATS FUKUSHIMA, DOES IT ? (福島はどんなことがあってもくじけないぜ)

震災直後から県民を励まし続け

猪苗代湖ズ登場

ライブの大トリを飾ったのは、震災直後から県民を励まし続けた猪苗代湖ズ。ライブの最後、高橋優、怒髪天らが奏でるメロディー、圧巻のパフォーマンスとストリートなメッセージが約1100人の聴衆を魅了した。BRAHMANのボーカル、TOSHIILOWさんは「みんなはこれから福島をどうしたいんだ。俺たちに何をしてほしいんだ。教えてほしい」とメッセージを送った。



【風が吹いた】

奥会津からいわきまでの県内6カ所を横断するようにライブを開催し、福島から元気を発信したロックイベント「LIVE FUKUSHIMA」が、9月14日、15日、16日の3日間、志田浜を会場に開催された。

サンボマスター、BRAHMAN、高橋優、怒髪天らが奏でるメロディー、圧巻のパフォーマンスとストリートなメッセージが約1100人の聴衆を魅了した。BRAHMANのボーカル、TOSHIILOWさんは「みんなはこれから福島をどうしたいんだ。俺たちに何をしてほしいんだ。教えてほしい」とメッセージを送った。

メッセージを追い風に

出演したアーティストたちが語った、福島や猪苗代に対する思いやメッセージは、会場を訪れた町民や県民を励まし、他県から来たファンを共感させた。「福島は負けない。復興に向かって前に進もう」という気持ちで会場全体が一つになった。

「福島の未来をどうしたいんだ、聞かせてくれ」「未来のために力を貸してくれ」。

出演者が奏でたメロディーや語った言葉は、私たちの心を揺さぶり、踏み出す一歩を後押しする力強い追い風のようなだった。



「福島の未来をここから始めよう。世界中の人の心に、未来に、みんなの心を届けよう。みんな、力を貸してくれ！」
サンボマスターの山口隆さんが発したメッセージは、激しい風のように聴衆の心を揺さぶり、会場全体の心をつににした

特集

福の風

東日本大震災の発生直後、私たちは混乱の中で
今を、明日をどうするかを考えていた。
震災から半年以上が経過し、私たちにできることも徐々に変わってきている。
今を生きることを考えていたあのころから、少し先の未来を考える時期へ。
わたしたちはどんな生活を、どんな古里を取り戻したいのか。
そしてそのためには何が必要なのか

猪苗代の現状

東日本大震災から半年以上が経過した。原発事故に見舞われた県内では、いまだに不自由な避難生活を続けている人や原発事故の影響による被害に苦しむ人たちも多い。そしてそれは、観光と農業の町である本町も例外ではない。

合宿や修学旅行などのキャンセルで団体客が減少しているほか、二次避難者が退出したホテルや旅館でも空室が目立つという状態。個人の観光客も減っており、入込客数は昨年の半分以上に減少した。

農作物では、放射性物質が検出されていないにもかかわらず、安値で取引されるものや購入を敬遠されるものがあるなど、一部品目が風評被害と言われるものの影響を受けている。

低レベルの放射線を長期間にわたって浴び続けることが、人体にどのような影響を与えるかについては、データが少ないために分からない。私たちはいまだに目に見えない脅威との戦いを強いられている。

そんな向かい風とも言える状況の中、イベントで被災者を勇気づけるとともに、福島から元気が活発になってきている。

【風を起こす】

「ジンギスカップ」や「懐かしの沼尻軽便鉄道を訪ねて」は、毎年町内で開催されてきた大会。震災の影響で本年は開催が危ぶまれたが、猪苗代の元気を町内外に発信したいと実施に踏み切った。イベントを開催したからこそ、この町に来てくれる人がいる。自らが動き、風を起こす。その意義がイベントから見えた。



出発進行の掛け声とともに川桁駅を出発した参加者

懐かしの沼尻軽便鉄道を訪ねて

昭和の大ヒット歌謡曲「高原列車は行く」のモデルとして知られ、1969（昭和44年）年に廃止された沼尻軽便鉄道。その鉄道跡を歩く「第13回懐かしの沼尻軽便鉄道を訪ねて」ウォーキングイベントは10月1、2日の両日、旧路線跡などで開催された。参加者は秋風を頬に受けながら思い思いのペースで歩き、心地よい汗を流した。町商工会青年部などで作る実行委員会が主催したこのイベントには、約180人が参加。2日には川桁駅から中ノ沢温泉までの約18⁺の旧路線跡を歩いた。全11箇所の駅跡では、スタッフ

第5回ジンギスカップ in 磐梯高原

初秋の磐梯高原の自然の中を、マウンテンバイク(以下MTB)にまたがり、風を切って駆け抜ける。第5回ジンギスカップ in 磐梯高原は10月1、2日の両日、南ヶ丘牧場周辺のMTBコースで開催された。

大会は、実行委員会と運営委員のジンギス友の会などの主催。補助輪付きの自転車に乗る幼児のスーパーキッズクラスから、競技者向けのエキスパートクラスまでの男女別全15クラスで争われた。約300人の参加者は、大自然の中を切り開いて作られたコースに悪戦苦闘しながら、全力でレースに挑んだ。



1_ スポーツ、エキスパートクラスのスタート直後。上り1号線を一気に駆け上がる
2_ コース内最大の難所の一つ、転倒者続出の3熊ドロップス 3_ レースでは本気の表情を見せるお父さんも、スーパーキッズのレースでは、すっかりやさしい顔に



Interview

ジンギス友の会会長
(大会運営委員)
森山栄幸 さん

Moriyama Hideyuki
繡次

「猪苗代ならできる」理由

私が帰郷したころ、県内で3つあったMTBの大会は、現在すべてなくなってしまった。他県の大会に出て楽しく走っているのに、なぜ地元ではできないんだと思い、この大会を企画した。猪苗代ならできると信じて頑張った結果、規模は小さいが、今では日本を代表する選手が来てくれる大会になった。南ヶ丘牧場の皆さんやスポンサーとして協賛してくれる企業の皆さんにも本当に感謝している。皆さんがいることも猪苗代ならできるとした理由の一つ。この大会を通じて、猪苗代を広くアピールしていくことで皆さんに恩返しをしたい。来年からも頑張っていくので、町内で協力してくれる仲間を募集している。



Interview

懐かしの沼尻軽便鉄道を訪ねて実行委員長さん
佐藤智弘 さん

Sato Tomohiro
八千代

触れ合いを感じるイベントに

今大会は、風評被害の影響や放射線量など、いろいろなことを検討して開催にこぎつけた。参加者は約180人と、例年と比べて少ないが、2日間を通して参加する人の数は目標数を上回るなど、ある程度達成できた目標もあった。現在、猪苗代や福島県は、原発事故の被害の中にあり、少し元気を失っているように感じる。こんな時だからこそ、イベントを開催できるくらいの放射線量であることや猪苗代は元気であることなどをしっかりとPRしていきたい。お客さんと話をして、直接メッセージを伝えられるような、お客さんが触れ合いを感じられるような、そんなイベントにしていきたい。



木地小屋～沼尻間にある森のトンネル

が参加者の切符を切ったり、互いを気遣い、声を掛けあったりしながら交流を深めた。

旧沼尻駅の駅舎では、吾妻小学校の児童が描いた軽便鉄道の絵画展を開き、優秀作品を選ぶ

投票が実施された。終点では、宿泊券や温泉入浴券などが当たる抽選会、民話の語り、手打ちそばや豚汁などの振る舞いなどで参加者のゴールを祝い、好評を博した。

ジンギスカップの名のとおり、レース終了後にジンギスカンが食べられるのもこの大会の魅力の一つ。参加者は、チームメイトや家族と南ヶ丘牧場の名物に舌鼓を打った。

大会には、アテネ五輪日本代表の竹谷賢二さんと現役国内トップクラスのライダー山本和弘選手も参加した。日本を代表するMTBライダー2人は1日、ボランティアでMTBスクールを開催。参加者から募金を募り、その全額を福島県と宮城県南三陸町のたがつねMTB大会への寄付とした。

自ら動き、風を起こす

震災の影響で、本年は開催が危ぶまれた両イベント。しかし、実行委員会からは諦めなかった。現状をただ嘆いていても何も変わらない。イベントは、町民と町外から来た人が交流する絶好の機会。交流を通じて、町民のメッセージを町外の人に発信できる機会であるとも言える。

こうしたイベントに、町外から参加したい、手伝いたいと言ってくれる人がいるのも、イベントそのものを開催したから。自分たちが動いたからだ。自ら動き、新しい風を起こす。復興に向けた重要な取り組みだ。



竹谷賢二 さん Takeya Kenji

【SPECIALIZED 契約アドバイザー】

4度の全日本選手権優勝、アテネ五輪日本代表などの実績を持つ日本のトップライダー

東北のレースには、人とのつながりから参加するようになった。そんなつながりで復興支援活動をしている。私たちにできることは、とにかく動くこと。そしてその運動を広めること。1人から2人へ、2人から4人へと広がればいいと思う。草の根活動かもしれないが、草の根がなければ、芽も出ないし花も咲かない。これからもいろいろなイベントに参加して、自分にできることをやっていきたい。



山本和弘 さん Yamamoto Kazuhiro

【CANNONDALE RACING TEAM 所属】

W杯、世界選手権やジャパンシリーズにも出場する現役国内トップクラスのプロライダー

竹谷さんが復興支援イベントをやると聞いたので参加した。震災後、選手として何かできることはないかと考えていた。自転車の好きな人をハッピーにしたいと思って来たが、自分と会って喜んでくれる顔を見るとうれしく思う。福島の大会は少ないので、この大会に参加して福島の方の生の声を、震災の真実を聞こうと思った。今回聞いた話をこれからの復興支援に還元したい。

【今、その思いを】

未曾有の大災害に見舞われる私たち
この現状を乗り越えるには
もう一步を踏み出すことが必要だ
無理はしなくていい
一人一人が、自分にできる一步を



ここから第一歩を

未曾有の大震災に見舞われた県内では、原発事故の影響で観光客が減少している。福島産の商品の返品や買い控えなどが起こっているのも現状だ。それも国内だけの話ではない。

現在、世界中のどこの国に聞いても「フクシマ」という名前が好意的に受け入れられることはないだろう。

この現状を打破し、望む未来を手に入れるためにはどうしたらいいだろうか。県内に漠然と漂う閉そく感。そこに風穴をあけられるのは、他でもない私たち自身だ。自分自身に何ができるかを考え、とりあえず、できることから始めよう。それが第一歩を踏み出すことだ。

イベントへの関わり

現在、町内で開催されているイベントは、昨年まで継続的に開催されてきたイベントだけではない。本町では、さまざまな復興支援イベントも開催されている。

10月1、2日の両日、町内のリステルパークをメイン会場に開かれた「第1回うつくしまあるきめですin猪苗代」などもある。一つで、2日間で延べ約



1200人が参加した。川桁地区の曲淵大根クラブ会（佐藤智昭会長）は、地元産の野菜や果物などを販売し、参加者と交流を深めた。

イベントに参加して、何かを感じ取る。スタッフとして参加して、積極的に手伝ってみる。自分がイベントを開催するなど、関わり方は人それぞれだ。無理にイベントに参加する必要はない。参加者や通りがかりの人との何気ない会話や笑顔。それは行動したことと同じだ。



1 アンコールも「I love you & I need you ふくしま」。お年寄りから子どもまで会場にいる全員が熱唱（風とロック） 2 切符を切りながら言葉を交わすスタッフと参加者（沼尻軽便ウォーキング） 3 家族や友人の温かい励まし？に周囲からも笑みがこぼれる 4 今大会もボランティアで猪高生が参加。佐藤早さん（左：3年）と武藤由美子さん（右：同）（34 ジングスカップ）

地元の魅力を再発見

「原発事故の影響によって、県産品の売れ行きは悪い。観光客も減少している。このピンチを自分たちが住む猪苗代や福島の自然、歴史や文化などを再発見するチャンスにしてはどうだろう」ジングスカップ大会会長など、さまざまなイベントで役員を務める渡部英一さん（みなとや代表取締役）は、取材先でそう話した。

悪い評判は放っておいてもすぐに広まるが、良い評判はコッソリと地道に積み重ねていくしかない。しかし、良い評判を積み重ねていく間に、人と人とのつながりや絆ができれば、広がり方が変わる。口コミは最強の情報伝達手段だ。その方法で伝えられた良い評判は、強い力を持つて広がっていく。

今まで行ったことのない県内の市町村に行き、観光をする。観光客向けのガイドブックなどを片手に、町内の史跡などを巡ってみる。きつと新しい発見があるはずだ。

発見した魅力を、友だちや知り合いに話す。復興支援イベントなどを通して交流を深めた人に伝える。そうすれば、魅力を知った人は、それを他の人にも伝えてくれるはずだ。私たち自

身が猪苗代の、福島の魅力を再発見すること。これも新しい一歩、立派な復興支援だ。

自分ができる一歩を
復興支援イベントなどで、私たちに向けられた励ましの言葉やメッセージは、前を向き、一歩を踏み出す力になる。それと同時に、他の誰かと話をするとき、私たち自身の言葉は猪苗代の、福島の今を伝えるメッセージになる。

私たちは、メッセージの受け手であると同時に発信者、つまり、一人一人がメッセージヤーなのだ。それを意識することで、また新しい一歩が踏み出せるだろう。

誰かが発するメッセージで、誰かが動くその姿を見て、私たちは動き出すかもしれない。私たちが動いたその姿を見て、他の人が一緒に動き出すかもしれない。

私たちの起こす風は、猪苗代からの、福島からの風。その風がいつか、回りまわって幸福を運ぶ風となって猪苗代や福島に吹いてくれたら。

そのためには、私たち一人一人が、自分にできる一歩を。

特集 福の風 終わり

「うつくしまあるきめです」に参加



田んぼの稲も磐梯山もきれいで景色が最高でした。初めて歩いた天神浜も、また来たいねと話しました。今、県内はどれも大変な状況ですが、あまり悲観ばかりせず、いろいろな経験をする機会と思って頑張っていきます
伊東日出子さん（左）、松本三起子さん（右）：二本松市

「ジングスカップ」に参加



正面に磐梯山を望む最高のロケーション。アットホームな雰囲気があふれる会場。そして玄人好みのテクニカルなコース。まだまだ大きくなる大会だと思う。運営する側は大変だと思うが、こんな時期だからこそ頑張って続けてほしい
佐藤哲也さん：川俣町

「風とロック」に参加



サンボマスターと猪苗代湖ズを見に来た。バカみたいな熱さと、変に整っていないところがいい。私の実家はいわき市にあるので、原発事故は「くやしい」の一言。今日はまっすぐなメッセージに励まされた。ここから復興を目指して頑張りたい
矢内一成さん：宮城県仙台市

「懐かしの沼尻軽便鉄道を訪ねて」に参加



猪苗代の知らない場所を歩いて楽しかった。スタッフはもちろん休憩所の皆さんもとても親切に声をかけてくれた。ゴール後のそばもおいしかった。イベントというにぎわいづくりは、参加した人も地元の人元気にしてくれると思う
佐藤康子さん（左）、佐藤敦子さん（右）：北塩原村勤務

イベント参加者からの Message